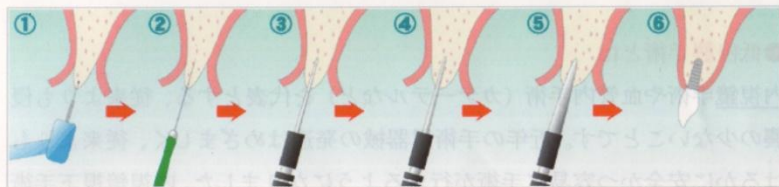


## 第九章 OAM (大口式) インプラント

インプラントはヨーロッパ発祥の治療法です。もともとは欧米人対処の治療法でした。私たち東洋人は欧米人に比べて、骨幅や骨高において骨量不足は否めません。骨量不足と判断された患者さんのインプラント治療には、骨移植や骨造成が必要でした。

しかし当院が導入している OAM (大口式) インプラント法では、骨移植することなくインプラントを埋入することができます。

### ●OAM (大口式) インプラント法の流れ



- 1.骨に小さな穴を開けます。
- 2.リーマーで骨を拡げます。
- 3.~5.専用器具 (オーギュメーター) で骨を拡げます。
- 6.インプラントを埋入、一定期間後に補綴物を装着

通常、インプラントを埋入するには骨をドリルで削るため、骨が無くなってしまいます。ところが OAM (大口式) インプラント法は、骨を拡げる術式のため、骨量不足の方でもインプラントを埋入することが可能です。

### ●OAM (大口式) インプラント法のメリット、デメリット

#### 《メリット》

- ：骨幅が少ない場合も、人工骨の補填や自家骨の移植を必要としない
- ：極端に少ない場合は、最低限の人工骨の補填が必要です。

：骨が柔らかくインプラントの固定が難しい場合も、固定が良好  
小さな穴から拡げるため、柔らかい骨密度が上がります。

：ドリルの使用する頻度が少ないため、危険が少ない

：ドリルの使用する頻度が少ないため、骨に与えるダメージが少ない

：組織に与えるダメージが少ないため、治癒が早い

OAM (大口式) インプラント法は低侵襲手術と呼ばれています。

《デメリット》

：従来の方法に比較してやや手術時間が長くなる

ドリルで削らないため歯科治療特有の電動モーターを使用しません。歯科医師の手指による丁寧な手術のため、ゆっくりと慎重におこないます。

### ●低侵襲手術とは

内視鏡手術や血管内手術 (カテーテルなど) を代表とする、従来よりも侵襲の少ないことです。近年の手術用器械の発達はめざましく、従来よりもはるかに安全かつ容易に手術が行えるようになりました。内視鏡視下手術に関しては、体表の切開創こそが小さく入院期間も短くなっています。

歯科における低侵襲手術 (治療) は“ミニマルインターベンション”と呼ばれます。ややこしい説明は省略しますが、できるだけ歯を抜かない、抜歯して何かで補う場合は、なるべく残った歯のダメージ (削るなど) を最小限にとどめるという考え方です。

虫歯を削るよりも再石灰化、抜髄よりも歯髄の保存、抜歯より歯の保存、ブリッジよりもインプラントという治療法の選択になります。

また、目指すゴールが同じ治療であれば、身体に負担をかけない方法を選択することになります。



●OAM（大口式）インプラント法のコンセプトは“安全・安心”

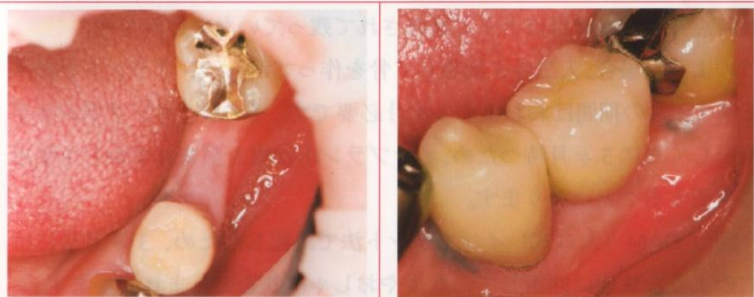
この方法の最大のメリットは“安全・安心”です。

この「安全・安心」という言葉、インプラント治療において色々な意味合いがあります。

- ：ドリルを使用する機会が少ないから、安全・安心
- ：骨を拡げて大きなインプラントを埋入できるから、安全・安心
- ：人工の骨、動物の骨を移植しないから、安全・安心
- ：骨が丈夫になるから、安全・安心
- ：骨の高さが低くならないから、安全・安心

歯科治療において大切なこと、それはいつでも安全に安心して治療が受けられることです。

●治療例（器具販売会社カタログ資料から引用）



左の画像をご覧ください。骨幅が非常に細いことが観察できます。

患者さんは既に治療済の手前の補綴物（オールセラミックスクラウン）を外して歯を削り、奥のインレーを除去してブリッジの支台することに抵抗があり、インプラント治療を希望されました。

本来であれば、骨移植、もしくは骨造成処置を施してからのインプラント治療になるところを、OAM（大口式）インプラント法にて手術当日にインプラントを埋入し、3ヶ月後に補綴物を装着しました。



こちらの患者さんも手前の金属焼付セラミックスクラウン 2 個と奥の銀歯を除去し支台としたブリッジにすることに抵抗がありました。

また年齢的（50 代女性）に入れ歯を選択されることはなかったため、インプラント治療で対応しています。

左の画像をよく観察すると粘膜の陥没している部分があります。この部分には骨がありませんでした。もともと歯周病であったため、抜歯をした時点で頬側の骨はほとんど吸収されて残っていない症例です。

このような場合、人工骨を補填して骨を作ってからインプラントを埋入します。この期間はおおよそ6ヶ月必要です。その後、インプラント手術をして更に3ヶ月待つため、インプラント治療を望まれてから1年近くを要することになります。

今回は OAM（大口式）インプラント法で処置したため、3ヶ月後には右のような状態に回復して、食事やおしゃべりを楽しまれています。

OAM（大口式）インプラント法は名古屋市立大学医学部・元客員教授が考案、開発されたインプラント治療法です。